千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第12号　13～21（2016）
研究論文

保育施設における乳児観察の方法

― タビストック式乳児観察法を手がかりに ―

波多野　名奈

The methods of infant observation in nurseries

― implication from the Tavistock model ―

Nana HATANO

Abstract

The purpose of this report is as follows:
1）to summarize how the psychoanalytical observation method has been incorporated and contributed to the care and education for young children in England; 2）to evaluate the potential that this method brings to the research on care and education for young children in Japan.

The first known use of psychoanalytical observation method in nursery contexts was the research experiment conducted by S. Isaacs at the Malting House School in the 1920's. This report, however, will focus on other stream in this field; the Tavistock model. Tavistock has long developed psychoanalytical observation method in its training, and now it is widely referred in and outside of England. This report evaluates the research by P. Elfer, which studies children's emotional dimension of nursery life through the psychoanalytic observation method based on the Tavistock model, and to find the potential for combining psychoanalysis and the care and education for young children.

This report concludes that the psychoanalytical infant observation has two benefits. First, it can be a method to deepen the understanding of the children by the observer. Second, the act of "observation" itself can be a transformative experience for both the observer and the observed.

キーワード
乳児観察　精神分析学　子ども理解　タビストック・モデル　観察者の主観

１．はじめに：問題の所在

日本では、就学前の子どもに関わる諸制度の抜本的な改革となる子ども・子育て新制度が2015年よりスタートした。これにより、都市部で喫緊の課題とされる待機児童問題と過疎化の進む地方自治体の保育の合理化という問題の解消が同時に目指される。国際的動向としては保育の「質」がますます問われる状況にあるが（OECD 2006）（OECD 2012）、子どもや子育てを巡る諸問題をまずは数として量的に捉え改善していく段階にあるのが日本の現状である。しかし優先順位は下げられているとはいえ、平成24年の子ども・子育て支援法附則において、「教育・保育その他の子ども・子育て支援の量的拡充及び質の向上を図るための安定した財源の確保に努める」（下線は引用者による）と明示されることとなった点からも、保育の「質」はやはり国家の課題として無視できない重要性をもつということができよう。ところで、この「質」という言葉の意味するところについては様々議論があり、「必ずしも一致した「質」について論じているとは言い難い」（秋田, 箕輪, 高櫻 2007, 294）が、処遇や職員配置という外的条件以外に、保育を担う人々の子ども理解の深さや豊かさが「質」に含まれることに異論はないだろう。保育所保育

指針は質の高い保育を展開するためには個々の保育者の資質向上が不可欠であるとの認識を示しているし、「「保育の質」は「保育者の質」に尽きるといわれるほどに、保育者のあり方に追うところが大きい」と述べる諏訪は、「保育の質」を捉える指標・概念図の中軸に「保育者の意識」を据えている（諏訪, 金田, 土方 2000）。日本における保育の「質」は、研究及び実践の両面において「保育者のあり方」や「保育者の意識変容」を問うてきたと言うことができるのである（秋田, 箕輪, 高櫻 2007, 298）。このような背景のもと、保育者の意識変容をもたらす研修やカンファレンスのあり方・手法についての研究、そして研修や対話の素材となる様々な媒体を使った記録の取り方・扱い方についての研究が蓄積されつつある（秋田 2009）。

保育の質を保育者の実践や保育者と子どもとの関係性の中から読み取ろうとする保育実践研究の領域では、観察データを量的に収集する行動観察やアンケート調査などを駆使した伝統的な手法が根強く力を保つ一方、文化人類学から援用されたエスノグラフィの手法や、M-GTAなどに代表される、いわゆる「質的」な研究手法も勢いを増している。保育者と子どもが共に生きるフィールドに直接足を運んで調査を行い理論へとつなげる後者の研究手法は、津守眞（津守 1987）（津守 1997）を先駆者としながら多くの保育研究者が採用しており、これらの積み重ねにより「保育研究はようやく実践の学としての確立へ歩みだした」（無藤 2003, 103）と評されるようになった。中でも鯨岡峻によって理論化されたエピソード記述の方法論は、研究者のみならず実践者自身が行う保育実践研究においても有効な手法として、多くの研究者や実践者が学ぶところとなっている（鯨岡 2005）（鯨岡, 鯨岡 2009）。

この鯨岡によるエピソード記述は「間主観的アプローチ」と呼ばれ、その理論的土台は精神分析学である。分析家が患者（クライエント）と時間・空間を直接的に共有し意識や行動のみならず無意識の領域も対象にする精神分析は、観察者（臨床家、研究者、実践者）の存在が観察結果に及ぼす影響を不可避かつ本質的要素として世界中で展開してきた。サリバンやロジャーズを引用しながら、鯨岡は自身が提唱する「間主観的アプローチ」という手法の臨床的側面について、以下のように述べている。「精神科医は傍観者的あるいは無関与的に患者を観察するのではなく、一人の生身の人間としてそこに現前し、そのように現前する限りにおいて、つまり人間的な対話や感情の動きを通して患者に何らかの影響を及ぼしつつ、観察する」（鯨岡 1999, 114）。しかしながら鯨岡は、精神分析学に理論的方法論的に強く依拠しながらも、実践研究の現場に精神分析学の概念を積極的には持ち込まない。保育の現場で語られる「エピソード」を、精神分析学の言葉で語ることはしないのである。一方英国においては、子ども理解や保育観察の有効な手段として精神分析が認められ、その手法が実践者達に広く学ばれているという（平井 2009）（Britzman 2009）。本研究は、英国において精神分析学の知見がどのように保育実践に取り入れられ貢献しているかについて概括し、この手法が我が国の保育観察、実践研究において拓く可能性について検討する。

２．タビストックにおける乳児観察の歴史

精神分析的観察技法が英国にて最初に乳児の保育・教育という文脈において取り入れられたのは、1920年代にS. アイザックスがMalting House Schoolにて行った実践研究である（Elfer 2011）。子どもを対象とした精神分析の臨床は、精神分析学を創始したS. フロイトの「少年ハンス」の事例に遡るが、これは父親を介した間接的な治療であり、児童分析と呼ばれる一領域を確立するのはM. クラインである。クラインは当初ベルリンに活動の拠点を置いていたが1926年にロンドンに移り住み、ここを拠点に多くの精神分析家達に影響を与え、英国における精神分析学の発展に寄与した。しかしクラインが目の前にしていたのはあくまでも治療の対象としての一人の子どもであり、保育・教育の文脈で精神分析を志向するのは、やはりアイザックスを待たねばならなかった。

第二次世界大戦に際してS. フロイトとA. フロイト親子が英国に亡命したこともあり、英国は当時の精神分析の中心地となった。1910年にロンドンで設立された国

際精神分析協会（International Psychoanalytical Association）は、その後の精神分析学を国際的に牽引していくことになる。同時期、後にThe Tavistock Clinic（現在のThe Tavistock and Portman NHS Trust。以下タビストックと表記）となるThe Tavistock Square Clinicは、S. フロイトやC. ユングの影響を受けた精神力動的な領域を扱う部署を設立し、戦後、J. ボウルビイを親子部門の長に迎えた。タビストックは、第一次世界大戦前後から兵士の脳障害や心理的障害を専門に扱う医療機関だったが、J. ボウルビイ、W. ビオン、D. ウィニコットなどの精神分析家をスタッフとして迎える中で、特に、子どもと親子関係を対象とした精神分析的心理療法の訓練施設として実績を重ねるようになる[i]。現在では、教師、医師、看護師、ソーシャルワーカー、プレイセラピスト、ケアワーカーなど、英国のみならず国外からも様々な領域の専門家が学んでいる（脇谷 2012）[ii]。

アイザックスの精神分析的教育実践は、英国の教育学の領域において進歩主義的児童中心主義教育を促進したとして評価されている（椨 1978）（大塚 1995）が、アイザックス本人は、Malting House Schoolにおけるこの実験教育を「「精神分析理論の教育への応用」ということはできない」と述べている。「このこと（アイザックスが精神分析理論を学んだ者であり、英国精神分析協会の一員であるということ：引用者注）は必ずしも教育実践に影響を与えるものではない。私はフロイトについて学ぶよりずっと以前からデューイの教育理論における幼児や生徒の教師として訓練を積んできたし、精神分析家としてのみ、あるいは精神分析家であることを第一義として学校での仕事に携わってきたことはまったくないのである」（Isaacs 1933, 18）。アイザックスにおける教育と精神分析との関係についてはいくつかの見解があるが、下司晶が当時の英国の教育と精神分析を取り巻く状況を丁寧に追いながら整理している（下司 2006）のでここでは扱わない[iii]。次節ではアイザックスとは別の流れで精神分析の手法と保育の領域が結合した事例、つまりタビストックでの訓練をベースに発展してきた乳児観察の手法[iv]を、P. エルファーの研究を手がかりに検討する。

3．保育をめぐる英国の状況と精神分析的観察技法の価値

エルファーによれば、保育実践現場で採用される精神分析的な乳児観察技法は、園生活という社会経験に参入する子どもの心的経験を理解するという点において価値がある。「タビストックの観察手法がもたらした大きな貢献は、園における情緒的問題（emotion matters）についてどれだけの注意が払われているか、そしてどれだけしばしば教育的成果を第一に考えるという建前の元にそれが見落とされていうかということを、浮き彫りにした点にある」（Elfer 2010, 62）。1990年代は英国において、乳児の保育に対する予算が飛躍的に増加した時期であった。その要因は第一に、経済的な必要性から女性の労働力確保、第二に女性の社会参画の促進、そして第三には学力促進と平等の達成のために政府が幼児の早期の生活に介入しようとしたことにあった。第三の目的のため、一兆ポンド近くがSure Start Programに費やされ、保育園（Nursery）の数は爆発的に増加した。保育園で一日の大半を過ごす子ども達が増える中、エルファーらは園生活における子どもの情緒的経験の質に焦点を当てる必要性を説いた。「家庭での保育同様、保育園で重大な期間を過ごす幼い子ども達が受けるケアの方法に転換を見出すならば、我々は園生活の感情的次元（the emotional dimension of nursery life）の理解を深める必要がある」（Elfer 2010, 63）。

従来の発達心理学や愛着研究における観察は、もっぱら、客観的に観察可能な行動から直接得られる情報を分析の対象とし結論を導き出す。そこでは観察者はデータとは距離を取り、透明な存在として人格や個性を消す。データから観察者の息吹が感じられることはあってはならない。しかしながら精神分析的観察技法は、直接観察可能な諸行動の背後に横たわる無意識的領野にも焦点を当てる。その際導きの糸となるのが、不安と防衛、分裂的ポジションと抑うつ的ポジション、投影と容器、転移と逆転移などといった、いくつかの精神分析的概念である。特に、アイザックスの時代に

はあまり注目されていなかった転移と逆転移という考え方は、現在の精神分析の世界では中心的な無意識的コミュニケーションのフォームとして捉えられており、タビストックの主要なプロジェクトにおいても、保育者と子どもの間の関係性の中で生じる不安や苦しみと愛の感情の源泉を探るキーワードとなっている（Elfer 2010）。

４．P.エルファーによる精神分析的乳児観察の事例

エルファーはタビストック流の精神分析的観察手法を採用して保育現場におもむき、記録をとっている（Elfer 2011）。以下にて、この概略を述べると共に、この手法の特性、及び、従来の行動観察や鯨岡のエピソード記述との相違点をまとめる。

【観察の方法】４つのナーサリーに通う７～31カ月の16名の子ども達が、保護者の同意のもとランダムに選ばれた。一人につき約60分を、週１回の頻度で平均４回観察した。観察の最中にノートはとらず、終わった後すぐに自由に思い浮かぶままに細部に至るまで書き起こされた。それは、コンテクストの詳細に没入するより、出来事の連続性と観察される子どもの反応に注目するためである。また、観察が進行するに伴って自らの中に生まれる感情の強さや変化にもできるだけ注目し記録された。これをグラウンデッドセオリーにより分析し、最初はテーマレベルにて、その後小分類に分けていった。この分析結果は、他の評価者によって精査され、観察者自身の主観や解釈に影響を受けたかもしれない様々な要因に注目が与えられた。また、観察データは園のスタッフからのインタビューやフィールドワーク日記によって補足された。

【事例】18カ月のグラハムの事例。グラハムは、８時から17時まで、週4日プライベートナーサリーに通っている。エルファーは、グラハムがビッキーというスタッフに特別の愛情を示していることに注目し、家庭から園へ、園から家庭へという移行（transitions）の際に彼がどのようにビッキーを拠り所としているか、そして親やスタッフが彼の移行をどのように促進しているか、その重要性について示唆を与えている。

以下は、エルファーによるグラハムの観察記録の抜粋である。２回目の観察で、グラハムが父親に連れられて登園してきた場面であった。

「ケイティとビッキーにあたたかく挨拶をされて、グラハムは満面の笑みで行進しました。グラハムとケイティは抱き合いました。彼は、友達に会えてとても嬉しそうでした。彼のパパは快活に笑っていました。突然、グラハムはすこし不安そうになり、部屋に入ってきたときの喜びはもはや消え去ってしまったかのように、しくしく泣きながらパパのところに駆け戻りました。パパはハグをしました。そのおかげで、グラハムは部屋の中に戻ることができました。ビッキーは彼を抱き上げ、パパはもう一度、グッバイを言いました。グラハムは、ビッキーの腕から顔をあげようとしませんでした…。パパは笑って、「あれー、冷たいなあ」と言い、グラハムを繰り返し呼びました。彼はビッキーに言いました。たぶんグラハムは、昨夜彼のおしゃぶりを「最後ね」と言って取り上げたことを、怒っているんだと。「ちょっともめたけれど、私たちが勝ったんです」最終的には、グラハムはちらっと見たので、パパはそれで十分と思ったようで、もう一度優しくグッバイを言った後、去っていきました。」

グラハムは期待と喜びをもって登園しているが、同時に家庭からの分離に対する不安を表明している。父親はハグをし、家庭から園への移行（transition）をあたたかくサポートすると同時に、ビッキーの腕から顔をあげず父親の言葉に応えようとしないグラハムに何度も声をかけることで、親愛と関心のメッセージを送っている。また、グラハムの無視を否定するのではなく、昨夜の怒りの持続という意味付けをして、その解釈をビッキーに手渡している。この観察は、家庭から園へという移行時に子どもが抱く複雑な感情と、その感情の表明の仕方、そして周囲の大人がどのように子

どもの繊細な心の動きをサポートしているかというプロセスを明らかにしている。

次の観察事例はもう一つの移行、園から家庭へという場面である。園はお迎えを待つ時間帯にあり、クラスには迎えに来る親、迎えられる子ども、去っていく子ども、取り残される子どもなど、様々な感情が入り乱れる状態にあった。観察も回数を重ねており、最終段階にさしかかるこの場面では観察者エルファーとグラハムとの直接的コミュニケーションが生まれている。

「部屋の雰囲気は、ある意味待つような感じでしたし、子どもたちは漂い、何をするのか自分たちでもよくわからないという状況でした。（略）親たちが到着するたびに、家に帰ることを思い出した子どもたちは興奮し、まだ待たなければならないということに困難を感じているようでした。グラハムの反応は親しみをもったものでしたが、毎回ドアまで走って行っておしりをドアにくっつけ、誰も出られないようにしていました。それは、スタッフによって優しくしかし断固としてひきはがされるまで行われました。」

ある一組の親子が帰っていき、グラハムが取り残されたとき、彼は突然、玩具を払いのけて落っことし、大きな声で笑った。そしてエルファーに近づき、じっと見つめた後、*「突然、グラハムは何かを投げるか私をぶつかのように腕を持ち上げました。好奇心と楽しさの入り混じった笑みを浮かべて。」*エルファーは、グラハムのこの行動を自分の気を引くためではないかと感じた。

「私は彼の行動に傷つきやすさ（vulnerable）と無力さ（helpless）を感じて少しひるみました。傷つきやすさと無力さの感情は、グラハムによって部分的に投影されたものかもしれないと思いました。彼の行動の一つの解釈は、他の子が帰ってしまうのに自分は待たなければならないというような、彼自身の傷つきやすさや無力さを伝えようとしたというものです。傷つきやすさや無力感を表出すること、あるいは抱えることができず、他の子が帰るのを止めることさえできませんでした。それは、分裂され、私の中に投影されました。その時、ビッキーがおむつを替えるために彼を抱き上げ、彼の落ち着きが崩壊しました。」

グラハムが特別の愛着を示しているビッキーが彼を抱き上げたことによって、彼は泣き始める。*「最初はしくしく、続いて激しく、しつこく泣きました。（略）ビッキーは、今忙しいのよと説明しました。彼は激しく泣きました。最終的には、ビッキーは（親たちに渡す）クリスマスカードの仕事を終え、グラハムのところへ来ました。彼は、彼女の腕の中で急速に落ち着きを取り戻していくように見えました。」*

５．考察

①観察者の主観の利用

精神分析的概念と技法を用いた乳児観察の明らかな特性の一つは、観察対象との関係の中で観察者の中に生じた情緒的反応を手がかりにしながら解釈を行うという点にある。エルファーは、「私をぶつかのように腕を持ち上げ」るというグラハムの行為に対して、「ひるみ」、「無力さを感じ」た。自分自身の中に生まれたこの感情を通して、エルファーはグラハムがお帰りの時間に取り残されることで受けるストレスフルな傷つきやすさや無力さの感情を、観察者であるエルファーに「投影」した、と解釈したのである。自分の中におさめることのできなかった感情を、最初はエルファーに「投影」、つまり投げ入れて処理しようとしていたグラハムだが、それは成功しない。「ビッキーのあたたかい眼差しによって、グラハムは一方で傷つきやすさと怒り、他方で愛という分裂した感情を再び統一した」（Elfer 2011, 11）とあるように、特別な愛着関係にあるビッキーが彼を「抱え」ることによって、彼女は彼の感情の「容器」となり、この「容器」の中で彼ははじめて安心して自らの感情を溢れ出させることができたのである。

観察者の主観という点でもうひとつ、重要な要素を指摘しておかなければならない。それは、「観察の最中

にノートをとらない」という点である。観察者は観察の最中、そこで起きる出来事を自らの身をもって「体験」することに専心する。メモや写真、映像などに頼らず、観察の終了後、記憶だけを頼りに「細部にいたるまで」、できるだけ詳細に書き起こす。出来事や観察対象の行動だけでなく、観察者本人の中に生じた感情の揺れについても意識的に記録される。

タビストック式乳児観察の訓練では、観察者の「主観を通る」ことの重要性が説かれている。データの客観性ではなく、個々人が出来事をどのように体験し、それを意味づけるかに価値がおかれる。とはいえ、最初から解釈のストーリーを構成することが求められているわけではない。記録それ自体は、観察者が見たこと、聞いたこと、感じたことを、できるだけそのままのかたちで書き起こすことが期待される。その書き起こすプロセスの中で、自然にストーリーが立ち上がってくることもあるし、第三者と共有する中で新たな解釈が生まれることもある。

保育観察の方法を「エピソード記述」として理論化した鯨岡峻は、「参加観察において観察者＝研究者は、まず出会ってくるものの前に自らが感受する身体として現前すること、そして印象受容能力を高め、その出会ってくるものすべてにおのれを開くこと」（鯨岡 1998, 74）が重要であると述べている。また、西隆太朗は、実践者自身が関与しながら行う事例研究において、実践者の主観性は排除されるべきものではなく、むしろ実践者の主観的関与やコミットメントの深さが質の高い研究へとつながると指摘している（西 2013）。鯨岡も西も精神分析学を参照していることから、保育実践研究において精神分析的方法論が有効であるということは改めて主張するようなことではないだろう。とはいえ、観察者・実践者がどのように自らの主観性を観察のツールとして利用するかという方法論については、保育・教育の領域において十分に議論されているとはいいがたい。「〈観察者自身の主観的反応〉に含まれる問題性を意図的に使いこなす技法」（西平 2005）である精神分析学に学びながら、観察者の主観性について保育の独自性を切り分けていくことが、今後より一層求められるであろう。

②観察者を支える枠組み

観察者の中に生まれる様々な情緒的反応を解釈の手がかりにする精神分析的乳児観察は、観察者にとっては途方もない負担を強いるものである。エルファーはグラハムとの関係において、自らが「傷つき」、「無力さ」を感じている。客観性を追求する観察方法ならば、観察対象と観察者との間には心理的距離があり、それによって観察者の心情は守られる。精神分析的乳児観察においては、観察者が観察対象の心的世界に対してオープンであることが求められるため、時に観察対象のネガティブな感情を投影されぶつけられて、自らの心も消耗する。クライエントに情緒的に引きずられる危険性については、心理療法を担う専門家にとっては周知の事実であり、だからこそ面接にはかなり厳密な「枠組み」、セッティングが存在する。面接時間を厳密に守ること、決められた場所以外でクライエントと会わないこと、自らのプライベートな領域を守ること、などである。

エルファーの観察にも、観察者を守るためのいくつかの枠組みが設定されている。週一回、60分という枠組みは、精神分析の臨床枠に準ずるものである。また、観察の記録は他の評価者によって精査され、観察に対する助言を受けている。つまり、観察の中で体験したことを自分ひとりの中におさめず、共に「抱え」てもらうことで、その重さを軽減するという体制が整えられている。

観察における時間的設定や第三者によるデータ評価は、保育研究においても特に客観性の担保という目的のもとで採用されており、目新しいものではない。しかし、これらが観察者を支え、守るための「枠組み」として設定されている点に注目したい。保育の領域では目の前の子どもに対する「共感的理解」の重要性が自明視されているが、子どもの心的世界に自らを添わせることの痛みやストレスについては多く語られていない。保育現場において実践者たちは無意識的に、特に子どものネガティブな感情については、自分の感情

をブロックする。たとえば、集団生活開始直後の母子分離の場面において、泣き叫ぶ子どもの心情に深く共鳴しようとすれば、日々の実践は途方もなく重苦しいものとなるであろうことは、容易に想像ができよう。

本論の事例における観察者は保育実践者ではなく外部の研究者であるが、実践の場においても、子ども理解の基盤は、子どもとともに在り、体験を共有し、感情を通わせることにある。保育実践者の心をどのように支え、保護していくかについての重要な示唆が、この手法には含まれているのである。

③観察者と観察対象との関係性への着目

精神分析的乳児観察における観察対象は、厳密に述べると眼前の「子ども」ではない。エルファーの事例で言うならば、エルファーが見ているのはグラハムという一人の子どもではない。観察の対象にされるのは、グラハムとエルファーという二人の関係性、つまり、観察者と観察対象との関係性である。生身の身体を備えた一人の人間として観察対象の前に現れる観察者は、観察の進行にともない観察対象の世界において意味ある他者としての輪郭を顕わにしていく。観察開始直後、グラハムの世界に登場しなかったエルファーは、最後の観察においてはグラハムの心的舞台の演者として役割を与えられ、それを果たしている。この観察者と観察対象との関係性を、児童精神分析学者であり小児科医でもあったウィニコットは「赤ん坊というようなものはいない（There is no such thing as a baby）」という端的な言葉で表現している。「赤ん坊のことを話そうとすると、*赤ん坊と誰か*について話すことになってしまう。赤ん坊はひとりで生存することはできず、ある関係の欠くことのできない部分として存在するのである」（Winnicott 1957, 88）。

精神分析の臨床の場において、時にセラピストはクライエントの心的世界を投影する鏡としての役割を果たす。セラピストは、クライエントの幻想上の母親や父親の像を投影され、それを受けとめることによって現実の関係を進行させていく。セラピストが解釈の素材とするのは、あくまでもクライエントとセラピストの関係性なのであり、クライエント個人の閉じた世界ではないとするのが、現在の精神分析学対象関係学派の主流である。

エルファーの事例に立ち戻ってみると、当初、グラハムと彼の父親、園での主たる養育者であるビッキーとの関係性に距離を置いて観察していたエルファーが、最後の観察時においてはグラハムの行動から自らの感情を揺り動かし、それを解釈の素材としていることがわかる。また、グラハムにとっても観察者エルファーが、自分の思いを照らし返す鏡として意味をもった存在になっていることがうかがえる。観察の実際において、観察者は観察対象者に対して何らかの直接的アクションを起こすわけではないが、観察者がある一定の時間、定期的にそこに存在し、観察対象に対して視線を与え続けるということ自体が大きな意味をもつと、この観察手法においては考えられているのである。観察者が観察対象とどのような関係性を築いていくのか、観察されるという経験が観察対象である子どもにどのような影響を与えるのかという点に向かう繊細な感性が、ここでは求められているということができよう。

6．まとめ

精神分析的乳児観察の手法は、二重の意味で価値をもつと考えられる。一つは、観察者が子ども理解を深めるための手段として、もう一つは、「観察」という行為が観察対象及び観察者自身に変容をもたらす経験として、である。子どもを「みる」ことが、同時に自分自身を「みる」ことに重なる。子どもにとっては「みられる」という経験が、観察者を「みる」という逆向きの現象を生む。子どもの心に近づこうとする努力は、子どもに向けて自らの心をひらくことでもあり、結果として観察者自身の心の動きへの感受性を高めることになる、というのが、精神分析的乳児観察の本質である。

タビストックの乳児観察のトレーニングコースには、心理臨床の専門家だけでなく、ソーシャルワーク、医師、看護師、教師、ケアワーカー、宗教関係者など、多様な職種の人々が学ぶと聞く。乳児を対象にした職

の人々だけでなく、人間とかかわることを職務する幅広い人々が集う理由はおそらく、これが人間の情緒的ダイナミズムへの繊細な感性を磨くと同時に、自らの隠された心的世界を発見し、自己変容を迫る訓練法だからであろう。

翻って保育の領域に立ち戻ってみると、受容と共感を重要な要素とする保育は、精神分析の臨床実践との親和性が高いと思われる。「そうだよね」「わかるよ」などといった表面的な「共感」ではなく、子どもの心情がダイレクトに流れ込み自らの感情が子どもに向けてあふれ出るような珠玉の一瞬が、保育の日々には確かに存在する。しかし、共感力に優れた実践者であればあるほど、自らの感情を使い果たして燃え尽きるということもしばしば指摘されている。このような意味において、精神分析が長い歴史のなかでつくりあげてきた観察者の心的世界を保護する枠組みは、保育の領域においても参照に値するものと思われる。また、保育の中で日常的に行われている保育者の子どもを「みる」という行為が、「みられる」子どもたちにどのような意味をもつのか、そして隠されていた自己を発見する手段として、観察するということが保育者自身にとっていかなる意味をもつのかについて考えていくことも、今後の課題である。

引用文献

Britzman,P. Deborah. The Very Thought of Education - Psychoanalysis and the Impossible Professions-. University of New York Press, 2009.

Elfer, Peter. *Psychoanalytic methods of observation as a research tool for exploring young children's nursery experience*. International Journal of Social Research Methodology, 2011, 1-14.

Elfer, Peter. *The power of psychoanalytic conceptions in understanding nurseries*. Infant Observation Vol. 13, No. 1, 2010, 59-63.

Gergen, Kenneth J. An Invitation to Social Construction. Sage Publications, 1999.　東村知子 訳. あなたへの社会構成主義. ナカニシヤ出版、2004.

Isaacs, Susan. Intellectual growth in young children. London: Routledge & Kegan Paul PLC, 1930. 椨瑞希子 訳. 幼児の知的発達. 明治図書出版、1989.

－. Social Development In Young Children. 1999. London: Routledge, 1933.

Nakaoka, Hiromi. *Coming to terms with daily separation: observation of two children's transition from home to nursery*. Infant Observation Vol.17, No. 3, 2014, 248-263.

OECD. Starting Strong Ⅱ:Early Childhood Education and Care. 2006. 星三和子, 首藤美香子, 大和洋子, 一見真理子 訳. OECD保育白書　人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア（ECEC）の国際比較. 明石書店、2011.

－. Starting Strong III - A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care. 2012.

Winnicott, W. Donald. The Child, the Family, and the Outside World. Penguin Books, 1964, 1957.

鵜飼奈津子. 子どもの精神分析的心理療法の基本. 誠信書房, 2010.

下司晶. 〈精神分析的子ども〉の誕生　フロイト主義と教育言説. 東京大学出版会, 2006.

鯨岡峻. エピソード記述入門　実践と質的研究のために. 東京大学出版会, 2005.

－. 関係発達論の構築　間主観的アプローチによる. ミネルヴァ書房, 1999.

－. 両義性の発達心理学　－教育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション－. ミネルヴァ書房, 1998.

鯨岡峻, 鯨岡和子. エピソード記述で保育を描く. ミネルヴァ書房, 2009.

佐々木美恵. 英国タビストック・クリニック方式における幼児観察の経験　－保育園における観察－. 福島学院大学研究紀要 41, 2009, 51-59.

秋田喜代美. 「保育」研究と「授業」研究－観る・記録する・物語る研究－. 日本の授業研究　下巻　第10章, 編集: 日本教育方法学会, 177-187. 学文社, 2009.

秋田喜代美, 箕輪潤子, 高櫻綾子. 保育の質研究の展望と課題. 東京大学大学院教育学研究科紀要　第47巻, 2007.

諏訪きぬ, 金田利子, 土方弘子. 「保育の質」の探求「保育

者－子ども関係」を基軸として. ミネルヴァ書房, 2000.
西平直. 教育人間学のために. 東京大学出版会, 2005.
西隆太朗. 保育者の省察に基づく事例研究の方法論－子どもたちとのかかわりを通して－. 乳幼児教育学研究, 第22巻, 2013, 53-62.
大塚忠剛. アイザックス幼児教育論の研究. 北大路書房, 1995.
中津郁子, 二宮麻利江, 山下一夫. 初心者カウンセラーによる乳幼児観察のありかた　－カウンセラーとしての資質を育むために－. 鳴門教育大学研究紀要 24, 2009, 20-32.
津守真. 子どもの世界をどうみるか　行為とその意味. 日本放送出版協会, 1987.
－. 保育者の地平　私的体験から普遍に向けて. ミネルヴァ書房, 1997.
平井正三. 子どもの精神分析的心理療法の経験　タビストック・クリニックの訓練. 金剛出版, 2009.
埋橋玲子. イギリスにおける「保育の質」の保証　－保育環境評価スケール（ECERS-R）の位置づけに注目して－. 保育学研究　第42巻　第2号, 2004, 92-100.
無藤隆. 保育学研究の現状と展望. 教育学研究　第70巻　第3号, 2003, 103-110.
脇谷順子. イギリスのタビストックセンターにおける児童青年心理療法の訓練と資格. 精神療法 38, 第6号, 2012, 75-82.
椨瑞希子. スーザン・アイザックスの幼児教育理論　現代幼児教育理論史の一試みとして. 日本の教育史学：教育史学会紀要　21号, 1978, 54-70.

謝辞

本論文を執筆するにあたり貴重な示唆と助言を与えてくださった脇谷順子先生に心から感謝申し上げる。

---

[i] ここに述べたタビストックの歴史の概略については、The Tavistock and Portman NHS TrustのHP及びKarnac Booksから出版されているタビストックシリーズの一連のテキスト、P. エルファーの論文等を参照した。

[ii] タビストックに学んだ精神分析家達の著作は数多いが、その訓練の内実を日本語で語るものは少ない。その中で、心理療法家平井正三及び鵜飼奈津子は自らの訓練経験を詳細に著しており、貴重な資料である（平井 2009）（鵜飼 2010）。

[iii] 本研究では現時点において、乳児期における「保育」と「教育」とを同一概念として扱わないが、切り分けて定義した際に両者と精神分析とがどのような関係性を持ち得るのかは重要な問題であり、次の課題としたい。

[iv] タビストック式乳児観察法を日本の保育の現場にて実践した先例はいくつか存在する（佐々木 2009）（中津, 二宮 , 山下 2009）が、いずれも心理臨床の訓練として行われた観察であり、保育実践に寄与するものとして当該観察法を捉えるものではない。また、英国の保育施設をフィールドにタビストック式乳児観察を実践した日本人の例として、Nakaokaの研究はたいへん興味深い（Nakaoka 2014）。